



リサーチ・ライブラリー(地下2階)の螺旋階段。



地下2階の劇場。



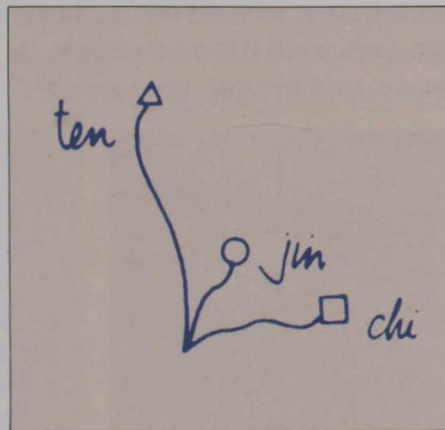
モリヤマ氏

日加文化の接点を探る設計概念

## 「遠慮」と「天・地・人」のメタファー

カナダ大使館新庁舎は、モリヤマ・アンド・テシマ設計事務所(トロント)の著名な日系建築家レイモンド・モリヤマ氏(写真)が設計構想を、清水建設が具体的な設計を担当した。鹿児島県出身の父、東京出身の母をもつモリヤマ氏は、オンタリオ・サイエンス・センター、スカバラ市民会館、メトロポリタン・トロント図書館など、利用者のための公共空間をうまく生かした公的建物の設計者として知られ、カナダ政府から勲章も受けているが、日本での仕事は今回が初めて。

モリヤマ氏の新庁舎設計構想には、さまざまな思いが込められている。ひとつは「遠慮」。例えば、新庁舎は大使館と賃貸部分が2つの高層ビルに「垂直分割」される代わりに、ひとつの建物の中で「水平分割」されたことにより、どちらも青山通りに面している。そして、近隣の日照を邪魔しないように建物をセットバックさせるとともに、赤坂御所から引込むように内側にやや傾斜している。これで、通行人も威圧感を与えないし、ビル風も避けられる。ガラス張りの大きな屋根のように見える5階以上の、青山通り側と高



橋は清記念公園側を大きく斜めに切ったのも、こうした「遠慮」の表われだ。

そして空間。4階のカナダ・ガーデンの着想。そこから見える高橋公園や赤坂御所の木々をはじめとする広い空間が広がる。いわばカナダの広さを象徴しているようだ。

もうひとつは、日本の生け花の「天・地・人」と、カナダの「産業精神・天然資源・国民」を、両国のメタファーとして、それぞれ三角(△)、四角(□)、円(○)で表現したこと

だ。例えば、四角い窓、4階にあるさまざまな円形のデザイン、「天」の字を描く屋根の片持梁。さらに、天(産業精神)はガラスとメタル、地(天然資源)は石材、そして人々の集まる場所は空間と光で表現されている。2つのメタファーを結ぶのは、人々という共通要素。両国の人々が4階の展示場やカナダ・ガーデン、あるいは地下2階の文化施設で出会い、話を交わし、信頼関係を築く。それが新庁舎の基本的な設計思想である。

また、黄昏の自然光の変化に合わせて4階展示場の照明がコンピューターで徐々に変わる(視覚)ようになっているほか、風で動く彫刻や滝(聴覚)、カナダ産の花崗岩(触角)、年中咲き誇る花壇(嗅覚)を配するといったように、人間の五感に訴える工夫もされている。文化施設が地下におかれているのも、人間と文化は地球、あるいは「地球の懐」と深く関わっていると考えられるからだ。またある神話では弓は親、矢は子供を象徴しているが、ドアの把手は弓の形をして天を向き、人々に天を目指すようにと告げている。